



大泉

「人は学ぶ」

「人は変わる」

「人は輝く」

10月号

令和5年10月9日

発行者 新村 紀昭

編集 相川 直綱

豊かな自己実現に向けて

世界に羽ばたこう

「過去は変えられないが、今日から未来は変えられる。それが人生なんだ。」

隻眼の飛行士前田伸二さんの言葉です。北海道本別町出身の前田さんは、幼い頃、訓練機が実家の上空を飛んでいる様子を見て、「いつか、僕もあそこから十勝平野を見るんだ」と夢を描いていました。中学卒業後、山梨県の日本航空学園に進学、大学は日本大学理工学部航空宇宙工学科へ進みましたが、大学1年の夏、交通事故に巻き込まれて右目の視力を失い、同時に夢は断たれました。日本でパイロットになるには両目が見えることが欠かせない条件だったからです。あきらめきれず国内の航空会社の社員に相談したが、「障害者だろう」とあしらわれ、就職活動でも「障害があるなら無理」と突き放されました。

20歳の時には生きていても仕方がないと思い自殺も考えますが、高校時代の恩師に「両親が悲しむと分かっているのか。死ぬ前にできることはたくさんある」と言われて目が覚め、事故で大学の単位取得は遅れたものの、土日猛勉強し4年で大学を卒業しました。

転機となったのは大学2年の春休みにシカゴの友人を訪ねた時のこと、そこで障害者が生き生きと暮らしている様子を目にし、卒業後に日本を飛び出して、シアトルで航空業関連のインターンシップ(就業体験)に挑戦しました。しかし、この時は、将来米国でパイロットになれるとは思っていなかったそうです。

1年後、インターンを終えると航空大学大学院の修士課程に進学し、航空の安全について学びました。クラスメートや教授陣の多くはパイロット経験者です。ある日、教授の1人から「情報をもっていない、知らない」と

いうことは本当に不幸なことだ。もっと不幸なことは、自分が何をやりたいか知っているにも関わらず、それを押し殺すことだ」と言われました。さらに、「諦めるのは早い。まだ何も始まっていない。なぜなら、おまえは飛べるのだから」と言われたそうです。

米国航空法では、身体に障害のあるパイロット候補生に対して米航空局が飛行試験を実施し、問題ないと判断されると「SODA 能力認定書」が発行されます。2004年にSODAを取得した前田さんは、翌05年操縦士免許を取得しました。渡米から3年で、ついにパイロットになったのです。

前田さんは、「日本では規制が多く、航空機は危険という固定観念があるようだ。そのため、障害者が空を飛ぶなんて『想像しただけでも危険』となるのだろう。米国では多様性(ダイバーシティ)という文化が明確にあり、外国人である私がパイロットとして活動できるのも、そのおかげだと思う。米国の場合、私のように身体に障害のある操縦士はそう珍しくはありません。でも日本では、私は『特別』なのです。」と述べています。

そして、前田さんは、なぜ飛び続けるのかという問いに、「パイロットに限らず、日本ではできなくても、世界のどこかに自分が掲げる夢や目標を実現させてくれる環境がある。ルールは守らないといけないけど、自分の可能性に挑戦するというのはありなのです。ちゃんと準備して挑戦して、それでもだめだったら、そこで初めて諦めればいい。そういうことを多くの人に伝えて、人生の選択肢の一つにしてもらえたらと思っています。だから、誰もが夢を追い続ける資格があるという「生き証人」として、飛び続ける必要があるのです。」と述べています。豊かな自己実現に向けて、参考にしたい生き方だと思います。(記事:読売新聞 5月23日付)

皆さんが入学した時には「学校行事はできない」という選択肢が残されている時期でした。小学校6年生の間、ほとんど学校行事がなく、宿泊行事もできなかった皆さんにとって、中学校3年間の集大成としての修学旅行は特別な想いがあったと思います。その分、体調不良等で今回は十分な形で参加できなかった仲間は残念な気持ちが大きいでしょう。しかし、参加できなかった仲間は、いずれ機会を得て、新たな仲間と日本の伝統文化を体験できるようになることを祈っています。

さて、今回の修学旅行では、多くの学びがありました。新幹線に乗るのが初めてという仲間もいる中で、行ったことがない土地の計画を立てることは難しかったと思います。しかし、2年生の都内班別研修で世界一難しいといわれる東京の交通網を使っても、ほとんど誤差なく帰ってきた黄色学年の皆さん。この経験があったからこそ、電車の遅延などのトラブルがあった中でも修正し、行動することにつながれたのだらうと思います。

そうした行動の集大成として、最終日に2つエピソードがありました。

1点目は、聖護院御殿荘での閉校式の実施の可否問題。

2日目に代表委員長から「今回は宿の方へお礼の言葉を全体でいう機会はないのですか？」ときかれました。3日目の朝はクラス写真を撮影する予定でしたが、その写真撮影だけでも、添乗員やカメラマンから「7クラスもあるから間に合いませんよ」と言われていました。そこで、前日の室長会では「写真を撮るのは時間的にとても厳しいから頑張ろう!」と話しました。また、2日目の夜の先生方の打ち合わせでの結論も「やはり閉校式を実施するのは厳しい。」でした。

3日目の朝。室長たちに写真を撮るときの説明をするので集合と声掛けをしたらすぐに集まり、説明を受けて部屋に戻っていききました。そうしていると、予定よりも早く準備を終えられているという先生方からの報告。添乗員からは荷物運送用のトラックが30分早く到着するという話、カメラマンもいつでも撮影OKという話を聞き、すぐに先生たちで協議して、みんなで作ったこの時間を閉校式に充てようと決めました。放送をしていた私の声が震えていたのに気付いた人もいたと思います。その後のみんなの動き、急遽呼ばれた実行委員長のお礼の言葉はさすがでした。すべての班が出発できたのが8時32分。素晴らしい団結力と行動力でした。

2点目は、京都駅発の新幹線に全員が「1分の停車時間」に乗り切るというミッション。

私が以前に行った修学旅行では達成できなかったこのミッションを



みんなは実現させました。家族旅行で乗り込むのと、団体で乗り込むのは難易度が全然違います。添乗員から「一番乗り込みが早かったのは大泉中学校でしたね」と言われた時、生徒全員が協力して乗り込んだことが分かり、とてもうれしい気持ちになりました。

ほんのささいな出来事ですが、皆さんが心をつにして、難しい行動も実現していく。そういう姿勢を3年間で身に付けてくれたことを強く感じました。

合唱コンクール、入試、そして卒業式。みんなで過ごす時間もあと半期になりました。1つの目標に向かって皆で挑戦し、取り組んでいく姿勢を最後まで持ち続けていきましょう。今回も、実行委員の皆さん、素敵な修学旅行を作り上げてくれてありがとうございました。



練馬区中学生生徒海外派遣報告会

派遣生 3 年 坂井佑樹 ・ 竹本莉里花

令和元年度から4年ぶりに実施された、練馬区中学校生徒海外派遣。派遣生は、6月から6回の事前研修で英会話やオーストラリアについて学び、日本の伝統文化を伝えるための準備を進めました。そして、オーストラリア・イプスウィッチ市に7月23日～30日の8日間、現地ではハイスクール5校に分かれて体験入学し、ホストファミリーの家での生活をととして異文化体験をしてきました。そして、帰国後、派遣生はタブレット等をフル活用して、グループごとにまとめを行い、夏休みには派遣団全体で報告会を行いました。

10月2日（月）本校の派遣生2名は、そうした経験を経て、自分たちの異文化体験を10分程度にまとめて報告しました。内容は日本と異なる学校生活や授業の様子、衣食住の違いなども報告してくれました。また、クイズやよく使われる慣用句を皆にも一緒に言ってもらうなど、体験活動もありました。全て英語による報告でしたが、わかりやすい単語が使われていて、皆さんにもよく伝わったことと思います。派遣報告、ありがとうございました。

※ 私も校長になる前、3年間、海外の日本人学校に勤務し、異文化を体験しました。巻頭言でも述べましたが、グローバル化が進む現代において、皆さんには視野を広く世界に向け、自分の可能性を追求する姿勢をもって、様々なことに挑戦してほしいと願います。



マナーアップ講習会

9月26日（火）進路選択が迫る3年生と、職場訪問が予定されている1年生を対象に、マナーアップ講習会を実施しました。講師には、学校法人大原学園高等学校で、高校生の受験や入社試験に向けた進路指導を担当していらっしゃる 大野理砂 先生をお招きしました。内容は準備していただいた資料に基づいて、礼の仕方や椅子の座り方、面接会場に入る際のドアのノックの仕方や部屋に入る際の所作などでした。実際に、参加した生徒全員で礼をする姿勢や椅子の座り方を学び、お互いに所作をチェックするなどして、楽しく学ぶことができました。

講師の大野先生からは、ここで身に付けたマナーは大人になっても一生使う、大切なものだというお話がありました。また、講習会后、本校について、大人数の学校ですが話を聞く姿勢ができていて、挨拶もよくできて、落ち着いた学校ですねとの評価いただきました。これからも、前向きにしっかり取り組む姿勢を、周りの人から応援してもらえるような姿勢をもって学校生活を送りましょう。

